

後始末

空き缶を持ち歩く先生をみて、片付けるのであろうと予測していましたが、思わぬ方向に進んでいきました。行き先は、第1理科室。1組の2年生が大気圧について学んでいました。大気圧で空き缶をつぶす実験をです。若干の水を空き缶に入れ加熱する。缶内に水蒸気を発生させて、缶の中の空気を追い出し、水蒸気で満たす。間髪入れずに熱した空き缶を、水で満たした水槽に入れると、空き缶は冷され、缶内の水蒸気も冷やされ液体に戻り、空き缶の中の気体の圧力が下がると、大気圧の大きさが勝り、つぶれるという仕組み。大気圧を感じる貴重な実験です。片付けられるはずの空き缶が実験器具を經由してリサイクルされる。SDGsです。



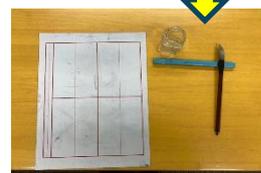
1階の美術室では、1年C組が「メッセージピクトグラム」に向けて、色の調整と、決められた範囲にはみ出さないように絵筆を使って色を塗る練習をしていました。指定された色に調整するには技術が必要です。終了5分前になると、片付けの時間になりました。なかなか色が落ちないパレットを懸命に洗う姿は美しい。芸術のようです。とは言うものの、たわしのようなものがあれば、ラクに落ちたことでしょう。



美術室の前の家庭科室に入ると、偶然にも3年生がアクリル毛糸でたわしを編んでいました。それも編み棒ではなく、自身の指で編んでいるのです。次から次へと毛糸を通し、編み進めていました。中には、網目の感覚が揃わず、ほどいてやり直す生徒もいました。



図書室では書道に取り組む姿を見ることができました。よく見ると墨汁が透明なのです。透明な墨汁なのに半紙の上に筆を滑らせると、文字が表現されていきます。その後には驚かされます。しばらくすると書いたはずの文字が消えてなくなっているのです。「この書道には片付けという言葉がないのか」というしやうどうにされました。筆に含んだ墨汁を半紙に吸わせて捨てる、机が汚れぬように敷いた新聞紙を丸めて捨てる。時には服にはねた墨汁に洗剤をこすりつけて…という片付けが要らないのです。これは「水書(すいしょ)」と呼ばれる書道の練習用シートなのだそうです。水にぬれると光の反射や屈折が変化する性質を利用して黒く見えるように加工されたシートで、乾けばもとに戻るといふ優れたもの。「片付け」要らずなのです。



3年B組は保健の授業。生活排水について学んでいました。パレットを洗った水も生活排水として流れていきます。その水は下水処理施設で処理され、汚泥を産み、汚泥は処理施設にて…。「片付け要らず」とは、ほど遠い世界に我々は存在しています。

かつて働いていた職場の先輩に言われた言葉。「後片付けは『散らかったものを整理すること』つまり元通りにすること。後始末は『何かの問題の後に処理すること。』つまり、元の形と異なり変化を生みだしているんだよ。」我々は「後片付け」ではなくリデュース・リユース・リサイクルを含め、未来のためへの変化となる

「後始末」の推奨と実行をしなければなりません。

